
道標（みちしるべ）

村元圭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

みちしるへ
道標

【Nコード】

N7172I

【作者名】

村元圭

【あらすじ】

主人公 村野信治は44歳のフリーカメラマンである、ある時突然 自分の母親が余命1ヶ月と知らされる。日々の生活で精一杯で、親子の絆 兄弟の絆なんて考えた事がなかった信治は、この事をきっかけに人生に一番大切なものを知ることになる。

東京 その1

時計の針はもう深夜の12時を回っている。

東京 南池袋にある雑居ビルの一室で僕はカメラのシャッターを押していた。

池袋駅から徒歩15分ほどにあるそのビルは7階建てでサンシャイン60を見上げる事ができ、部屋はデザイン事務所によくある様な白を基調とした先鋭された内装になっている。

薄暗くした部屋にシャッター音とストロボの閃光そしてストロボのチャージ音がこだまする。

「カッシャン！」 「ピピピピ・・・」

机の上に白のセトペーパーを引き、簡易的にストロボをライティングして、そこにECサイト用の商品を置き次々撮影していく。

撮影商品は健康食品、アクセサリー、ペットボトル等々多種にわたっていた。

フリーカメラマンになって15年以上になるが、この100年に1度と言われる平成の大不況により、僕の収入も半減した。

僕は今年44歳になる・・・ おっさんカメラマンには非情の冬の時代が来たのである。

去年までなら、フォトスタジオで撮影する予算が出たのだが、不況の為今年はそれが出ないのだ。

したがって、この雑居ビルの一室 すがわら菅原デザイン事務所 で撮影している。

ここの社長の菅原さんとはもう10年以上の付き合いである、この社長もモロに不況にやられている。

去年までは従業員が6人いたのだが経営不振により雇えなくなり、今は社長ひとりしかないのだ。

オマケに借金は5000万円もある。

それでも、泣き言を一言も言わず、前向きに生きている。

曰ころはバカな冗談ばかり言っているおっさんだが、その心の内は僕には計り知れないぐらい、深い事を考えているのだろう。

俳優の渡辺謙に憧れている菅原さんは、頭はボウズぎみの短髪で無精髭をたくわえている、長身でそれなりにカッコいいのだが、ただお腹だけは出ている。

僕より2つ年上の今年46歳のおっさんだが、この人とは妙にウマがあつ、僕は兄の様に慕い、菅原さんも弟の様に可愛がつてくれたいた。

なんと言うか、僕にとって 世界で一番氣を使わなくていい人 なのだ。

オツチョコチヨイな人だけど・・・この人の前では無邪氣になれる、言いたい事もズケズケ言える、向こうもそれを解つてくれて受け止めてくれる、この東京という少し冷たい大都会に生きている僕にとって大切な人なんだと思う。

「よし！信治しんじこれラストカットだぞ！」

いつもの様に能天気なテンションで菅原さんが僕に叫んだ。

昔からの知り合いである菅原さんは 村野信治むのしんじ と言う僕の名前を今では呼び捨てである。

「カッシャン！」 「ピピピピ・・・」

最後のカットの閃光が終わった。

撮影が全て終了したのは深夜1時前だった。

菅原さんがコーヒーを入れて運んで来た。

撮影が終了してから雑談の時間になる、これもいつものことだ。

この部屋の中で、一番夜景がよく見える窓際のテーブルにコーヒーを置き

「信治、悪いなあ　いつも安いギヤラでコキ使って・・・」
いつもの菅原さんのセリフである、ここのセリフから僕たちの会話はスタートするのである。

「いえいえ、仕事を頂^{いただ}けるだけ、ありがたいです」
と僕はいつもの様に両手を合掌しておどけて返事をかえす。

ここでもかならず二人して一瞬「にやり」と笑ってしまうのである。

「ねえ　菅原さん　サンシャインの窓の明かり全然　点^ついてないねえ」

この雑居ビルから見えるサンシャイン60を見ながら僕は言った。

去年までならこの時間でも、サンシャインの窓の明かりは何個か点いていたのだが・・・つまり今年は不況の影響でこんな時間まで残業する企業がないのである。

「まあ　不況だからなあ　残業なんてする会社なんてないよなあ・・・
・そんなことより　信治　オマエの方の借金はどうなったんだ？」
お得意のおどけた表情で菅原さんが尋ねてきた。

先月、僕がいよいよ借金しなくては、生活ができなくなった・・・

という事を話した事を覚えているのだ。

他の人には絶対に借金の話など言えないが、なぜかこの人には素直になっってしまう・・・

僕は黙って指を5本出した。

「あはっはっ 50万かよ！ 先月より10万 借金 増えてるじやねえーかよ」

菅原さんの言葉に僕は苦笑いをしてごまかしたつもりだったが・・・

「オマエ 50万なんてすぐ返せると思っているだろ？ところがそれは間違いだ・・・軽い気持ちで10万づつ借りて、気がついたらすごい大金を借金してしまっている。そう言う事になるなよ。俺なんて5000万だぞ、借金！！あはっはっ」

菅原さんは窓の外のサンシャイン60を見上げながら冗談ぽく僕に忠告をしてくれた、きっと心配してくれているんだろう。

この人はいつもこうなのである、重い話も笑いながら軽い感じでサラリと言っているのである。

借金の話はそれで終了した。そんな暗い話は僕も菅原さんも好きではないからだと思う。

子供の頃 大人になったら 難しい話をするとかばかり思っていた・・・
・経済や政治等々

もちろん そういった話もするが、僕と菅原さんは仮面ライダーとかガンダムとか昔のヒーロー者 マンガの話をよくした。

今日の話題は銀河鉄道999から始まり宇宙戦艦ヤマトまで及んだ。

46歳と44歳のおっさんが夜中に昔見た銀河鉄道999とか、宇宙戦艦ヤマト等のアニメ話をしてるのだ。

少し笑える事だと思う。

僕は思うのである。

僕はひよっとしたら 大人に成りきれてない のではないかと・・・
幼い頃に 何か忘れてきて それを探している のではないかと・・・

いや、大人になった今だからこそ、こんな先の見えない生活をして
いればこそ、不安なこの気持ちを昔見た懐かしいTVアニメの話で
もして自分自身を癒しているのかもしれない。

それは、目の前にいる菅原さんも同じ事が言えるのではないのか・・・

結局、大人といっても、どこかに安らげる場所がほしいのであると
思う。

東京 その2

時計の針はすでに深夜2時を回っていた。

そろそろ帰ろうかと重い腰を椅子から上げた時、部屋の隅に花束がある事に気がついた。

21インチのパソコンのモニターのある菅原さんの机の上にそれはあった。

撮影している時は、部屋を薄暗くしていたから気づかなかったが、美しい花束がバスケットいっぱいに入っているのだ。

「あの花束、なんなの？」 思わず尋ねた。

「ああ、あれは、来週 俺の オフクロ の誕生日なんだよ。それで、花をバスケットに入れて見栄えを良くして田舎に送ろうかと思っ……」

菅原さんは少し照れた様に言う。

「ほら、俺……15年ぐらい前 奥さんと子供放り出して、愛人に走っただろ……それから、オフクロに会わず顔がなくて……せめて、誕生日ぐらい、花束を贈ろうと思っ……」

「こういうセリフも他人様の様にとぼけて話している。

」

「今日のもうこんな時間だから明日梱包して贈ることにするよ……」

「そうなのである、人間46年も生きていれば、それなりの人生がある。」

菅原さんは今もその愛人と一緒に暮らしている、あれから15年も経っているのだから、もう愛人とは呼ばず内縁の妻と言っべきなのであろうが、あえて愛人と言っ言葉を使っているのだ。
その愛人という女は ひと 城山香織 しろやまかおり と言っ女で、ひと 僕も今となつてはよく知っている、ふくよかで、美人タイプで、氣立てのいい女だ。

その話は結構前に菅原さんから聞いていた。

菅原さんは18歳の時、秋田から上京し、デザイン専門学校に行き、広告代理店に就職し、そこで、奥さんと知り合つて結婚し、男の子ひとりを授かつた。

その後、独立してデザイン会社を始めるが、開業間もない頃 仕事がなかつた為、奥さんにいろいろ言われて夫婦仲が悪くなつたらしい。

その頃知り合つたのが今の内縁の妻 城山香織さん である。

「へえー結構 親孝行だね、お母さんと全然 会つてないの？」

「ああ・・・会つてないなあ・・・」

菅原さんは少し寂しそふ花束を見ながら言つた。

「なんで？」とは、僕は聞かなかつた・・・

大体の事は察しがつくからだ。

普通、夫婦円満であれば、お盆やお正月に子供を連れて帰省するもので、それを楽しみにお爺ちゃんお婆ちゃんは息子の帰りを待つている。

菅原さんはそれができなくなり、母親に合わせる顔がないのであるう。

「オマエの方はどうなんだ？ちゃんと親孝行やっているのか？」
菅原さんは花束をバスケットに整えながら言った。

「いや・・・俺なんて、全然、大阪に帰ってないなあ・・・」
僕の田舎は大阪であるが、自分が親孝行らしき事をやってないことを痛感しながら言った。

「まあ、そんなもんだろ、いつの間にか生活に追われて、親の事などそっちのけになっちゃうからなあ・・・」

「親の面倒は田舎のお姉ちゃんに任せきりだもんな・・・俺・・・」
僕は 兄 姉 そして僕 3人兄弟である。

一番上の兄は通信関連の大企業に勤めて10年ほど前から、ここ東京に転勤になっている。

姉だけが大阪に住んでいて、もちろん嫁に出ているが、親の面倒を見ている。

「そんな事言ったら、俺も田舎の兄貴に親の事は任せっきりだ・・・」

菅原さんは少し目を潤ませながら言った。

菅原さんも僕も同じ気持ちだったと思う。

親孝行したい気持ちがあっても、今の自分の周りに起こる事で精一杯なのだ、加えて田舎の兄弟に親の事すべてを任せっきりで、自分は何もしてしないジレンマと、申し訳ない気持ちでいっぱいなのである。

「でも、母親ってありがたいなあ、なんだかんだいろんな物 送ってくる、毎年秋には あきたこまち10kg送ってくるしなあ」

秋田出身の菅原さんは潤んだ目でちよっぴり嬉しそうに言った。

「うちの母親も お米 送ってくるよ」

僕もほんの少しだけ目を潤ませながら言った。

「そうか、どこの母親もまず、食う事を心配するのもなあ」

二人で大声で笑った。

東京 その3

もう、深夜3時近くになっていた。

菅原さんと仕事をする結構、雑談が長くなる。

これも、いつもの事だが・・・

「もう、こんな時間だな、帰るかなあ」

撮影機材を撤収し、まとめて菅原さんと担いでコインパーキングに置いてある僕の自動車まで運ぶ。

エレベーターで重い撮影機材の入ったバッグをひとり1個づつ担ぎ1階まで降りた。

外に出ると南池袋の街は完全に寝静まっていた。

街灯だけが煌々と明るく、^{ひとけ}人氣などまったくないのである。

もうすぐ、5月だというのに風が冷たい。

「でも、菅原さん 偉いね、ちゃんとお母さんの誕生日、覚えているんだもんね」

重い機材を担ぎ歩きながら僕は言った。

「そうかなあ・・・信治はお母さんの誕生日とか、何もやらないのか？」

菅原さんも僕よりは少し軽いが機材を運んでいる。

「うん、なんか送ろうとか思っではいるんだけど、気がついたら誕生日とか母の日とか、終わってるって事が多くて、結局 何もして

いない」

菅原さんは僕の返答が聞こえないのか無表情に歩いている。
僕たちの足音だけが、静かな池袋の街の闇と街灯の明かりに響く。
ほんの少しだけ欠けた月が昇っている。

「俺、計算したんだよ」

結構真面目な顔で菅原さんがいきなり言ったので、僕には何の事だかわからない。

「え？何の事？」

訳がわからないので、聞き返した。

「ああ、すまん。ウチのオフクロが80歳まで生きたとして、1年に1回 秋田に帰ったとすると、あと5回しか会えない計算なんだよ、これが」

えーと、僕も計算した。

ウチのオカンは、今75歳だから、80歳まであと5年・・・
1年1回だと・・・あらあ、僕も会えるのは5回だ。

「ウチもあと5回しか会えない計算だ」

僕は小さな声で返答した。

正直、少しショックだった、そんな事考えたこともなかった。
現代人の寿命が延びたとは言え、寿命80歳は妥当な歳だろう・・・
85歳まで生きたとしてもあと10回しか会えないのである。
90歳ならば、15回・・・いくらなんでも、そこまでは生きれない

いかも・・・

「いつまでも ありとおもうな おやと かね」

菅原さんはいつもの様にワントーン高い声でオチャラケて言った。

「昔から、そう言うだろ。 そういう事だ。」

今度は真面目な顔で言葉を継ぎ足した。

「それがわかっていているんなら、菅原さん、田舎あきたに帰れば？お母さん
もきつと喜ぶよ」

と言いたかったが、言わなかった。

菅原さんは全てをわかっていて帰らないのである、自分自身の中に
何かが引っかかっているのだろ、それを僕の思いつきの言葉で汚す
事のような気がしたのである。

「淳ちゃんの事もあると思うけど、両親に会えるうちに田舎おもやに帰っ
た方がいいぜ」

菅原さんは更に言葉を継ぎ足した。

淳ちゃん とは 僕の奥さん 村野淳子むらのじゅんこである。

なかなか言いにくい事だけど、ウチの奥さんは精神病患者である。
幼い頃から両親が不仲で、父親と母親の狭間で板ばさみにされ育っ
た事もあり、主にそれが原因で統合失調症になってしまった、今で
は両親との間に大きな確執がある。

統合失調症 幻覚や妄想などの症状を呈し従前の生活能力が失われ
てしまう病である。

つまり、点いてないTVから映像が見えたり、盗聴器が部屋のどこ

かに取り付けられていると思ったり、見ず知らずの他人が自分の悪口を言っているように思ってしまう病気である。

彼女の田舎は京都で、僕の田舎の大阪と非常に近い。

しかし、彼女は関西方面に帰省する事を異常に嫌がるのだ。

それもあって、僕は大阪に帰らない一つの原因でもある、その事を菅原さんは言っているのだ。

40歳を超えた夫婦ならば、普通子供がいてお互いの事を、子供に合わせて「パパ」「ママ」とか「お父さん」「お母さん」とか呼ぶのであるが、我々夫婦には子供がいない為、今でも付き合ってた頃のように僕は「淳ちゃん」と言っていたので、菅原さんも「淳ちゃん」と呼ぶ様になった。

「うん、わかった」

僕は頼りなく答えた。

南池袋から護国寺方面に10分ほど歩いた所のコインパーキングに僕は自動車を停めていた。

池袋辺りの相場は一日12時間停めて上限3000円から3500円だが、この辺りまで来ると上限1500円なのだ。

この不景気だ、2000円の差は大きい。

重い機材を自動車のハッチバックから乗せて、料金を1500円投入する。

ウィーン という機会音とともに車輪止が下がる。

「お疲れ様でした。」

自動車に乗り込み、窓を開け菅原さんに僕は言った。

「おう、気をつけて帰れよ！ この撮影分の請求書早く送って
くれよ！」

静かな街に菅原さんの大きな声が響いた。

「菅原さんの会社が潰れる前に出しますよ」

「あはっはー」

また、二人で大声で笑った。

静かな街に大きな笑い声が響いた。

「んでは！」

僕は静かに自動車を発進させた。

東京 その4

さて、今日はもうこんな時間だから、山手通りも空いているだろう。音羽通りを通って帰ろうかと思ったが、山手通りに向かった。

もう時間も3時半近くである、山手通りは予想通り空いていて、空車のタクシーがビュンビュンスピードを上げて走っている。そこに大型トラックも混じっているがこちらもスピードが速い。

こんな所で事故でも起こしたら、最悪だから、僕は逆にスピードを落としゆっくり走った。
相変わらず、山手通りは道路工事がいたる所でやっており、路面がデコボコの箇所が多い。

この空^すきようだと、僕の住む目黒の碑文谷まで、40分ぐらいで着くだろう。

菅原さんには言わなかったが去年の秋、小中学生の頃からの親友
安藤康弘^{あんどうやすひろ}が44歳を超えて結婚するというので、その結婚式に出席する為に大阪に帰ったのである。

約8年ぶりに、少しだけ帰省した僕の顔を見た両親の顔はとても嬉しそうだっ

「アンタが帰って来ると、家が賑^{にぎ}やかになってエエわ」
オカンは本当に嬉しそうにいった。

「そっやなあ」

オトンもニコニコしていた。

確かに、僕は子供の頃はおしゃべりな子だった、でももう40歳を超えているオッサンである。
そんなに、いっぱい話しもしない。

今思うと、子供達ほくたちが育ったそんなに広くもない家が、この両親にはとても広く感じ、年老いた夫婦には日常会話もそんなにある訳でもない。

末っ子の僕の少しの会話でもとても賑やかに感じたのであろう。

ただ、少し太ったオカンが、少々痩せているのが気になった。

「おかあーちゃん、ちょっと痩せたんちゃうん？」

「前に会った時、アンタに太りすぎちゃうか？って言うてたから、これ飲んでんねん」

オカンはヘルシア緑茶を嬉しそうに見せた。

「へえー これ結構、利くんやなあー」

僕が言うと、オカンは照れた様に笑った。

その後、久しぶりにオカンの手料理を食べ、安藤の結婚式に行った。

そんな事を思い出しながら、山手通りを南下して国道246を超えて、2つ目の信号を右折した。
思ったより早く家に着いた。

この家はまだ、僕の景気が良かった時に購入した、35年ローンだから68歳まで返済しなければならぬ。

今となっては どうするんだこの先！？ という不安だけである。

外観はモダンなレンガ造り風であり、小さい土地に3階建ての家である。

家の真横に駐車場はあり、大きな自動車では停める事のできない狭いスペース・・・

1階は洗面所とお風呂と6畳の洋室 2階は15畳のLDK 3階は6畳2間の洋室で、小さな土地を上手く考えた家である。

玄関を鍵で開け、2階のLDKに上がると間接照明を一番小さく絞った薄明かりの中で、テレビをつけたまま、ソファで淳ちゃん（ウチの奥さん）が寝ている、別に僕を待っていた訳ではなく、こうしないと精神病の彼女は眠れないのだ。

低いテーブルの横に座り、タバコに火を点けた。

そこにフェレットの アシユリ が膝元までやって来てお帰りの挨拶をしてくれる、僕たち夫婦には子供がいないので、このアシユリが子供のような感じになってる。

ウチのフェレット歴は結構長く、この子で3代目でフェレットの癖や育て方は十分熟知してるのだ。

アシユリという名前は、人の何倍ものスピードで歳を取る難病と戦う少女をテレビのニュース番組を見た淳ちゃんが感動して、その少女の名前をそのままこの子の名前にしたのである。

フェレットをゲージで飼う人が多いのだが、ウチでは放し飼いで、

部屋の隅に糞などされている時がある、一応トイレの場所は仕付けてのだが、頭が悪いのか気分屋なのか、たまに他の場所で糞をたれる……

でもこの子はもう自分では好きな所に行けない身体になっていた、インスリノーマという病気にかかっていて、つまりはフェレットのすい臓ガンである。

人間と同じで、すい臓までガンに侵されるともう完治は望めない、できるのは寿命を延ばす方法だけなのだが、フェレットの場合、この病気は異常に糖分を消費するらしく糖分の薬を摂取すのだが、その分脂肪がお腹まわりに溜まってしまい心臓に負担をかける、いかに糖分摂取と心臓の負担のバランスをとるかが、寿命を延ばすカギなのである。

フェレットの寿命は6歳ぐらいだがアシュリはもう6歳を超えている、若い頃のようにスリムではなく、病気の治療の為、薬を飲み今はお腹が横に出っぱり後ろ足もろくに地面に着かない感じでズリズリとはう様に前足だけで移動している。

僕はアシュリを抱き上げ2、3回 頭を撫^なで、ネグラである小さなテントにそつと置いた。

アシュリはゆつくと目を閉じた。

1代目のフェレットも2代目のフェレットもこの病気で亡くしているのだ……

小さな命の終演がもうすぐ来ているのを実感する。

今日はもう遅い、もう寝よう 明日は休みだ。
と言うより、暇なのだ……

淳ちゃんの寝ているソファの近くにマットレスを引き毛布に包ま
って僕は眠りについた、こうしないと、朝起きた時 淳ちゃんが不
安になるのでここ10年ほどはこんな感じが我が家の就寝スタイル
になっている。

3階の6畳には、ちゃんとベッドルームがあるのだが・・・

東京 その5

朝、僕は携帯電話のベルで起こされた。

時計を見ると8時である。

着信の所に 村野恵子^{むらのけいこ} と出ている。

間違いなく、ウチのオカンだ。

帰省は全然しなくても、2、3ヶ月1度オカンは電話をかけてくる。

年老いたオカンの朝は早い、朝4時には目が覚めると前に聞いた事がある、これでも時間を待った方なのであろう、そんな事を考えながら、電話に出た。

「もしもし、おかあーちゃんやけど」
いつも通りのセリフをオカンは言った。

「はい、はい。おはようさんです。」

「あんなあー 一週間^{いっしゅうかん}ぐらい前にアンタに掛けた保険の満期になった解約書類送ったけど、書いて送くり返してくれたかなあ？」と心配そうにオカンは言った。

あ、すっかり忘れていた。

昨日の菅原さんとの話しではないけど、オカンは僕に事故や怪我病気など起こった時の為、保険を掛けていてくれるのだ。

つまり、その保険が満期になり解約手続きに僕本人の免許書のコピーや必要書類に記入しなければならぬのである。

ありがたい事ではあるが、書類を書くのが面倒などで、後回していたら、すっかり忘れてしまっていた。

「ああ、ごめん 忘れとったわ、すぐ書いて送り返すわなあ」

僕はいつもそうなのだ、オカンの頼み事はいつも後回しなのである。

「ホンマにお願いやで、頼むわな」

「うん、すぐ送るわ」

それからオカンは僕の仕事の心配と淳ちゃん、つまりは甥と姪の話を聞いた、オカンにとって僕の仕事と淳ちゃんの事が一番心配なのであるう、僕は心配かけないように、あたり障りのない様に答えた。

僕もオトンの様子やお姉ちゃんの子供、つまりは甥と姪の話を聞いた、僕には子供がいなかったからこの甥と姪は自分の子の様に可愛いのである。

「ほんなら、また、お米とか送るからなあ、書類 書いて送ってなあ」

「わかった、ほんならなあ」

「ほんならなあ お願いやでえ ありがとう」

電話を切った、いつもの事だがオカンは最後に「ありがと」と付け足すのである。

当たり前の事だが、田舎の方言（僕の場合は大阪弁だけど）で喋られるところちも大阪弁になってしまうのだ。

忘れないうちに、書類を書かなければと思い1階にある6畳間の自分の机に向かって、書類を書き上げた。

それから、2階のリビングに戻って、マットレスに横になりテレビを見ているうちに、また眠りについた。

東京 その6

それから3日ほどたって、オカンから大きな荷物が届いた。

この分だと僕の出した保険の解約書類もオカンに届いたのだろうと思った。

中を開けて見ると、お米5kg、チョコレート、カップ麺、乾燥昆布、桃の缶詰、洗剤等々生活に必要な物が詰まっていた。

「助かるわぁー」
と淳ちゃんは大喜びだった。

精神病と言っても、いつも、うつ状態ではない、これも、良くなったり、悪くなったりで、その日によって少しづつ変わる。

「お礼のハガキを出そう」

いつも、オカンから何か荷物が届いたら、淳ちゃんはお礼に絵ハガキをオカンに宛てて出している。

10年ほど前までは嫁と姑の犬猿の仲だった2人だったのだが、淳ちゃんが精神病だとわかった時にオカンがそれまでの小言を控えるようになって、お互いに良い関係になったようだ。
それでも、やっぱり、変な気を使いあつてる様だ。

相変わらず、僕は仕事がなく暇な毎日を暮らしていた・・・

その日の夜のことである、夕食を済ませて、リビングでテレビのお笑い番組を見て横になってると、携帯電話が鳴った。

オカンが、書類が着いたという連絡をいれて来たと思ひ着信を見た。

はまざきゆき
浜崎雪となっている。

旧姓 村野雪^{むらのゆき} 結婚して浜崎雪になったが、僕の可愛い甥っ子と姪っ子の母親で、僕の実の姉である。

僕の幼い頃からの仕付け^{しつけ}はオカンよりこの3歳年上のお姉ちゃんが仕付けただけに、僕はこのお姉ちゃんに頭があがらない。

今、両親の面倒を見ているのも、お姉ちゃんだ、余計に頭が上がらない・・・

それよりなにより、お姉ちゃんから電話がかかってくる時は大体、小言が多いのだ。

淳ちゃんとオカンが犬猿の仲だった頃、

「お嫁さんの言う事ばかり聞かんと、おかーちゃんの言う事もちよつとは聞いてもええんちゃうんか！」と罵^{ののし}られた事がよくあった。それが今となつては、トラウマのようになつてゐる。

お姉ちゃんもオカンと同様に淳ちゃんの病気の事がわかってからは、そんなに小言を言わなくなつた。

今日は保険の書類が遅く着いた事で、小言を言われると思ひ恐る恐る電話に出た。

「もしもし、信治か？」

いつもより、お姉ちゃんの言葉が重いのがすぐにわかった、しかし、妙に落ち着いている感じもする。

「うん、」

何を言われるのか見当もつかない・・・取り合えず、返事だけした。

「あんなあ・・・おかーちゃんなあ・・・」

とお姉ちゃんは言った。

僕はやっぱり、オカンの事だと思ったが、それにしても、お姉ちゃんは歯切れの悪い言い方をしていた、何かいつもと違うのだ。

「うん、」

益々、何を言われるか不安になったので、また、返事だけした。

「昨日なあ・・・」

「うん、」

「体調悪いって言うからなあ・・・」

「うん、」

「お父ちゃんと一緒に病院に連れて行ったんやあ・・・」

ここで、僕はやっとオカンの体調が悪いらしい事を理解した。

「それでなあ・・・検査入院してなあ・・・」

「うん、」

お姉ちゃんの声が段々震え出してきたのがわかった、でも、僕には「うん、」と答える事しかできなかった。

「今日・・・結果出たんやけど・・・」

お姉ちゃんの声は震えを通り超して涙声になってきた。

「・・・」

僕はもう、返事もできなくなっていた。

おそらく、悪い病気である事は察してきた・・・

「すい臓 ガンやねん・・・て・・・」

・・・その言葉の意味を理解するのに時間がかかった・・・

「すい臓がん・・・」

その言葉を聞いた時、僕の感情は完全に停止した。

ショックって言葉は、こういう時に使う言葉である事を理解した。

と同時に去年の秋に帰った時にオカンが少し痩せていた事を思い出した・・・

すい臓は沈黙の臓器である。

自覚症状が現れて発見された場合はかなり病状は進行している、という事は僕も知っていた。

電話の向こうではお姉ちゃんが検査にいたるまでの経緯を泣きなが

ら説明しているのだが、何を言っているのか頭に入ってこなかった。

「それでなあ・・・」

お姉ちゃんの話が続けている。

「もつと、詳しく調べてみないと、わからんけど・・・」
と前置きをして話を続けた。

「あと・・・一ヶ月の命・・・らしいわあ・・・」

それを言い終わるとお姉ちゃんは号泣した。

僕の中からそれまで停止していた感情がいきなり怒りとなって浮上してきた、誰に対する怒りなのかわからない・・・

「なんで！なんで！ 去年の秋、帰った時あんなに元気やったやん！人間ドックにも行ってたって！おかあちゃん、言ってたやん！」
気がつくとその怒りをお姉ちゃんにぶつけていた。

「知らんやんか！知らんがなあ！・・・これが事実やん！現実やん！」
お姉ちゃんは完全にキレてしまった・・・お姉ちゃんにも、行き場のない怒りがあつたのだ。

そう言われて、僕は我にかえった。

「あ、ごめん・・・」
素直に謝った。

それからお姉ちゃんは、オカンが自分の病名がガンであると言う事

をすでに知っている事、しかし自分の余命が一ヶ月である事は知らないことを説明し、最後にオカン本人には余命の事は言わないようにしましょうと決めた。

「ほんなら、できるだけ早く帰る様にするわ」

「うん、おかあちゃんにも信治が帰ってくるって言っとくからなあ」
お姉ちゃんはまだ、少し涙ぐんだ声をしていた。

「・・・」

と電話を切ろうと思った時、今まで気がつかなかったがお姉ちゃんの電話の向こうで、もう一人泣き声がするのだ。
小さな声で鳴いている。

オトンである、オトンが泣いている。

今まで、僕はオトンが泣いている姿を一度も見ただ事があった、お爺ちゃんが死んだ時もお婆ちゃんが死んだ時も、オトンはまったく泣かなかった。

オトンが泣いている姿さえ想像できなかった。確かにオトンとオカンは本当に仲の良い夫婦であった、オトンにとっても本当に悲しい出来事なのだ。

電話の向こうから、オトンの小さく押し殺したようにむせび泣く声は、僕の胸の奥に響いた。

僕の止まった感情が今度は悲しみとなって涙があふれ出た。

「お父ちゃんに・・・代わってもらえる？」

僕は泣きながら、おねえちゃんに言った。

「うん、ちょっと待ってなあ」

「もしもし」

オトンが電話に出た。

「お父ちゃん・・・」

僕は何かオトンに言いたかったが、言葉にならなかった、ただ、涙だけが止めどなく流れてくる。

「まあ、そういうこちゃ！」

オトンは涙声を抑えて元気良く言った。

そういう人なのである、息子の前ではいつも、元気な父親であり続ける人なのである。

その態度に余計に涙があふれ出てきた。

オトンが元気なフリをすれば、するほど、オトンの辛さが僕の胸に突き刺さってくる。

「できるだけ早く帰るから、お母ちゃんのこと頼むでえ・・・」
涙が止まらない。

「お母ちゃんな、信治に会いたがつてるぞ・・・」

オトンのその言葉に僕は絶句した・・・それから後悔の気持ちでダンドン吹き上がってきて同時に号泣してしまった。

どうして今までもっと、お母ちゃんに会いに帰らなかったのか・・・
親孝行らしい事も1つもやっていないじゃないか・・・

ごめんなあ・・・

ごめんなあ・・・お母ちゃん・・・

「うん・・・うん・・・帰る・・・帰るから・・・」

「待つてるからなあ」

オトンが今度は優しく言ってくれた。

号泣のまま、電話を切った。

東京 その7

携帯電話を握ったまま、僕は先日菅原さんの言った言葉を思い出した。

「いつまでも ありとおもうな おやと かね」

その通りである・・・

親孝行なんて全然やってない・・・

その後悔だけが心の中に重くのしかかっているのだ。

親孝行っていったいなんだろう？

涙が後から次々、流れてくる・・・大声で泣けない僕の眼から、静かに流れ出てくる・・・

膝に少々重みを感じた・・・

いつの間にかフェレットのアシユリが、僕の膝の上まで来て下から僕の顔を、小さな眼でジーとこっちを見ている。

どうしたの？泣かないで・・・とでも言っているのだろう・・・と勝手に思いこんだ。

僕はアシユリを抱き上げ、涙で濡れている顔を近づけて頬づりをスリスリとした。

いつも思う事だけど、フェレットには人の不安や悲しい気持ちを吸

い上げてくれる能力があると思う。

心の中にあつた混沌としたモノがスウーと無くなっていく感じがする、涙も徐々に止まっていくのである。

この子もインスリノーマというフェレットのすい臓ガンなのだ、薬からの糖分摂取でお腹がデブっと腫上がっているアシュリの容姿マジマジを見た。

アシュリ　ありがとう　ありがとう

頭を2、3回なでて足元に置いた、いつもならば、すぐにネグラの小さなテントに帰るのであるが、今日はそこから動かないで、僕に寄り添って離れない。

気持ちが落ち着いてくる・・・

リビングを見渡すと、淳ちゃんがさつきと変わらない様子でテレビを見ている。

少しずつ涙が湧いて、感情もどうやらコントロールできそうだ・・・

「あんなあ、お母ちゃんなあ、すい臓ガンで・・・あと1ヶ月の命・・・らしいわあ・・・」

と、淳ちゃんに言ってみた。

「ふーん・・・」

テレビをジーと見たまま、淳ちゃんは言った。

え？それだけ？・・・

淳ちゃんはこの事態になんとも思わないのだろうか？・・・

僕は驚いたが、彼女の眼をよく見ると黒目くろめだけが微妙に激しく左右に動いてテレビを凝視している。

お笑い番組がやっているのだが、クスリとも笑わない。

淳ちゃんは完全に動揺していた、どう対処していいのかわからないので「ふーん・・・」と言ってしまったように僕は感じた。

「俺なあ、考えたら 全然、親孝行してない・・・どうしよう・・・」

精神病の彼女にこの手の事は言っではいけないと思っていたけど・・・

彼女自身もウチのオカンとは確執のあった時代はあったのだ、気にすると病気には良くないとわかっていたのだが、僕の心の中にずっしりと抱えきれないほどのこの後悔の念を思わず言ってしまった。

「・・・」

淳ちゃんはテレビを凝視し続けたままであった。

フレットのアシユリが僕の横から淳ちゃんの膝に重いお腹をズリズリと引きずりながら移動して今度は彼女の膝で丸くなり、そこに落ち着いた。

彼女はアシユリを両手で抱き上げ、頭を撫でて関西弁でこう言った。

「ウチのお母さんが言ってたけど、子供は3歳までで親孝行は十分

やってるから、もう親孝行はしなくてエエらしいわ・・・」

僕には淳ちゃんの言っている事がすぐに理解できた。

・ 赤ちゃんは可愛い・・・見ていだけで自然に笑顔がにじみ出る・・・

つまり、僕はすでに、赤ちゃんの頃から3歳頃までに、その愛くるしさや、可愛らしさで十分に親を楽しませてきている、それ事態でもう親孝行は終わっていると言っただ。

淳ちゃんの精一杯の励ましであり、彼女のお母さんの言葉に感謝した。

でも、僕には親孝行の実感はない・・・

今は何月だったのだろう？・・・そんな事も忘れていた。

携帯電話の日付を見た・・・5月1日である・・・

この5月中にはオカンは死ぬのか・・・

できるだけ早く帰ろう・・・大阪へ・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7172i/>

道標（みちしるべ）

2010年10月8日23時34分発行